

杉と菊陽の物語

大勢の人が訪れにぎわいを見せる

鹿児島県屋久島町ふるさと産業祭り。

姉妹都市として参加している菊陽町のブースには

菊陽産の野菜を求め、多くの人が集います。

2つの町は、共通する

「杉」をきっかけに結ばれました。

杉と菊陽の物語をひも解いていくと、

町と町、人と人のつながりが見えてきます。

私たちは互いを必要とし合うことで、

もっとつながり合っているはずなんです。

私たちが「菊陽人」として生きていくために。

菊陽—屋久島—杉

菊陽町と姉妹都市盟約を結んでいる鹿児島県屋久島町の「屋久島ふるさと産業祭り」は4月22日、屋久島町で開催され、大勢の人たちでにぎわいました。

菊陽町は昭和62年から旧屋久町と交流を始め、産業祭にも参加しています。今年も菊陽産の野菜や果物を多くの人に知ってもらおうと、特産の菊陽にんじんをはじめ、トマト、アスパラガス、いちごなどをたくさん用意して訪問しました。菊陽町のブースには、開始前から屋久島町の皆さんが行列をつくっていました。列に並んでいた屋久島町の今村和子さんは「菊陽のにんじんは生で食べてもおいしいよね」と、日高安子さんは「菊陽に交流会で行ったことがあるのよ」と、販売開始を待っている間、菊陽の魅力を笑顔で語ってくれました。

なぜ遠く離れた屋久島町の人たちがこんなに親しみを持って接してくれるのでしょうか。そこには、菊陽と屋久島を結んだ杉の歴史がありました。



菊陽町の特産品を買うために、大勢の人が列をなす。商品は開始から15分であっという間に完売するほど人気を見せた。

つたえる

豊後街道や町の移り変わりを見守り続けてきた杉並木。菊陽町のシンボルである「杉」はその昔、加藤清正が屋久島から取り寄せたという伝説がありました。言い伝えは時を越え、やがて現実となったのです。

歴史ある豊後街道

豊後街道は熊本から大分県（豊後国 鶴崎を結ぶ主要街道です。加藤清正は1588（天正16）年、大阪から鶴崎に着港し豊後街道を通って熊本に入国しました。清正は鼻ぐり井手の築造のほか、豊後街道の道幅を広げるなど大規模な整備を行ったといわれています。

江戸時代の街道は、路面維持や雨水処理がしやすいよう

に、人馬が通る部分が周囲より低く、道路の両側が土手になっていて凹道と呼ばれていました。豊後街道のうち、菊陽から大津に走る「大津街道」も同じ構造になっていました。道幅は、道路面でも30〜40メートル、両側の土手を含めると60〜80メートルにもなります。両側の土手の部分には杉が植えられ、その間をJR豊肥本線と旧国道57号が並んで走っています。日本の特色ある優れた道路「日本の道100選」にも選ばれました。

肥後の大杉並木

杉並木は熊本市の竜田口から大津の方里ヶ谷（現堀ヶ谷）まで約20kmの長さにわたって植えられました。この杉並木の景観に感動した幕末の学者・頼山陽はその美しさを漢詩で表しました。この漢詩を刻んだ石碑は杉並木陸橋の近くに今も残っています。

なぜ豊後街道に杉が植えられているのでしょうか。一説には加藤清正の時代に▼城を

修復するときの資材を確保するため▼敵が攻めてきたときに両側の杉を伐採することで、交通を遮断し進軍を防ぐために造られたなどといわれています。

現存の杉の西端は熊本市の黒髪6丁目にあります。杉並木として形が見られるのは武蔵塚より東側で、三里木から原水にかけては現在でも原型をとどめ、杉並木は菊陽を見つめています。

「屋久杉伝説」を現実

かつて頼山陽に感動を与えた杉並木も、明治維新後は枯れたり乱伐されたりといろんな理由で年々数が減少。近代化が進むにつれ、鉄道や道路の妨げになると伐採された例も少なくありませんでした。

そのような環境の中、先人から受け継いだ杉並木を守ろうとする人たちがいます。「旧豊後街道菊陽杉並木保存会」です。同会の代表であり、約60年の長きにわたり杉並木の保存活動を続けている高木廣次さん（入道水）は「昔は伐採派だった」と話します。しかし先人たちが受け継がれてきた杉並木を守るために活動

する保存会の趣旨を理解すると高木さんは一転して杉並木の保存に情熱を注ぎます。「郷土の宝を守り続けることがいかに大切かを学びました」。その思いは町民の間にも広がりました。杉並木の面影が薄れつつあった当時、「このままではいけない、杉並木を保存しよう」という機運が高まり、地域住民や関係機関が一体となって杉並木再生に取りかかりました。杉並木の杉には、加藤清正が屋久島から取り寄せ植えたとする「屋久杉伝説」があります。「整備するなら伝説どおりに屋久杉を植えよう」と、1986（昭和61）年、菊陽町は当時の屋久町（現屋久島町）に屋久杉の幼杉の譲り渡しを依頼しました。翌年、屋久島から取り寄せた屋久杉を植樹して、伝説は現実のものになります。町の人の思いを一つにした杉並木は「町の宝」となったのです。

「町の宝」となった杉並木は、時を超え、遠く離れた2つの町をつなぐことにもその力を発揮しました。これをきっかけとして、菊陽町と屋久島町の交流が始まったのです。

先人が残した杉並木の
素晴らしさを
受け継いでいきたい

私はもともと杉並木に対しては伐採派でした。台風が来ると杉が田畑に倒れてきて、収穫間近の米や野菜をダメにしてしまうからです。杉並木沿いの地区の住民たちと署名を集め、危険な杉を切ってもらおうようと（旧）建設省九州地方建設局に掛け合ったこともありました。しかし、杉並木保存会から協力を依頼され「杉は話せない。由緒ある杉を守り、受け継いでいこう」と思い直し、「杉の代弁者」として杉並木の保存・補植活動を行うようになったのです。菊陽町で一番大きかった樹齢200年（推定）の「菊陽太郎」が台風で倒れたときは、幸いその前に枝を挿し木して苗木を育てていたので、初代太郎の系統が断たれることはありませんでした。同じ場所に2代目太郎を補植しています。「菊陽太郎」のように、今後も保存活動を受け継いでいきたいです。



旧豊後街道
菊陽杉並木保存会

たかき ひろつぐ
高木 廣次さん
(入道水)

菊陽町木「杉」
大地にしっかりと根を張り、
天に向かって伸びている姿は
町の将来像を表しています。

INTERVIEW



菊陽町長
さとう みつお
後藤 三雄

今後心触れ合う交流を

遠く離れた両町が、「杉の縁」で姉妹都市として友好を深めることができうれしく感じています。これまで町民の交流やイベントなどとおし、多くの方々が行き来しながら心触れ合う交流を重ねてきました。離れていても両町には心のつながりがあると思います。このつながりを今後もより一層深めていきたいと思っています。



熊本市の北東部に位置し、豊かな自然環境に恵まれた地理・風土の中にある。人口37,734人(22年国調)。人口伸び率は県下1位。総面積 37.57km²。特産である菊陽にんじんは関東、中国地域など各地に出荷中。

菊陽

INTERVIEW



毎年すぎなみフェスタに家族で参加しています。今年も屋久島町特産のたんかんジュースを楽しみにしています。甘くて子どもたちも大好きです。

きよはら あや
清原 文さん (大堀木)
ゆづ 優月さん、みゆ 心優さん

「屋久杉伝説」が取り持つ縁でつながった菊陽町と屋久島町。杉をきっかけに町と町の交流が始まり、人と人も交流を始めました。交流を始めて約18年。今でも厚い友情が育まれています。

町をつないだ杉の縁

両町の交流が始まったきっかけは、屋久杉が植えられたとされる旧豊後街道菊陽杉並木の整備を進めるため、補植に必要な屋久杉の幼杉を屋久町に依頼したことでした。昭和62年に屋久町から屋久杉が贈られ、「旧豊後街道菊陽杉並木第1回植樹式」を行いました。それ以降、始めは職員研修や行政視察を行うなど行政レベルでの交流がスタート。翌年の第1回菊陽町農業祭には、屋久町から15人の友好参加があり、特産品の販売



つな

友情の証し

屋久町との姉妹都市盟約後、両町のつながりはより強いものになりました。平成12年には、台風で倒れた杉並木の補植用に屋久町から苗木など約150本が贈られました。植栽作業には屋久町の職員も参加し、杉並木の復元に大きな力を貸してくれました。同時に菊陽杉並木公園の一角にある「屋久島の森」には、屋久島に自生する樹木約150本を植え、その記念として「世界自然遺産の島」と書いた石碑を設置しました。また、菊陽町役場前と屋久島町の屋久杉の館ふれあい広場には同じ彫刻「森の精」が設置されていて、両町の友情の証しが数多く保存されています。

町民同士が触れ合う

毎年開催される菊陽町のすぎなみフェスタと屋久島町の



屋久島町木「屋久杉」



屋久島町花「ヤクシマシャクナゲ」



屋久島町鳥「ヤクシマコマドリ」



菊陽町花「菊」



菊陽町鳥「ひばり」

がる

産業祭には、互いの特産物を持って応援に駆けつけるのが恒例になっています。すぎなみフェスタでは屋久島特産のたんかんジュースや焼酎などが売られ、普段は手に入りにくい商品に来場者は目を奪われ手を伸ばします。

また、婦人会や子どもたちの交流も活発です。8月には小中学生24人が屋久島町交流会に参加しました。現地では山登り、屋久島町の子どもたちと一緒に魚つりや海水浴をして交流を深めました。菊陽北小5年の佐藤健さんは「屋久島町はいろんな植物や動物を大切にしていた」と、自然の豊かさを肌で感じていました。「屋久島町から友達が出来たときは『菊陽町に来てよかった』と思ってもらえるような最高の歓迎をしたい」と話す子どももいました。屋久島町との友情は、まるで両町の「森の精」が飛び交い運んでいるかのように、一層色濃くなっています。



両町の友情のシンボル「森の精」

や両町長による記念植樹が行われました。そして平成元年の「屋久町制30周年記念式典・屋久町自然館落成式」には、菊陽町から8人が参加し菊陽産の野菜などを販売しました。その後互いの交流は活発に続き、交流の輪は次第に民間レベルにも広がります。官民双方の交流を重ねる中で姉妹都市盟約に向けての機運が高まり、平成6年に屋久町と姉妹都市盟約を結びました。平成20年に屋久町が上屋久町と合併し屋久島町となってからも、姉妹都市として両町の間にはつながりが続いています。

INTERVIEW



今日は菊陽町のいちごを目当てに、孫と一緒に朝早くから産業祭に来ました。買ったいちごでいちご大福を作って、孫に食べさせたいと思っています。

あんどう みちこ
安藤 美智子さん (屋久島町)
ななと 奈々利さん

何千年も生き続けてきた『杉』が両町を結び付けてくれました。「姉妹という契の杯を交わした両町の絆は、杉の生命のように、未来永劫に途切れるはずもなく、またそうさせてはならない」。先駆者が築き上げたさまざまな交流を糧に、より一層踏み込んだお付き合いをさせていただきますよう、屋久島町民を代表してここに強く願います。

両町の絆は未来永劫一。

屋久島町
あらき こうじ
荒木 耕治町長



屋久島



鹿児島県本土から南方に約60kmの海上にある屋久島と口永良部島の2島からなる。人口13,589人(22年国調)。総面積は540.98km²。平成5年に日本初の「世界自然遺産」に登録された自然豊かな町。

つかむ

発展が期待できる
「希望の町」

菊陽杉並木公園に子どもを遊びに連れて来ていた坂下紀子さん(津久礼ヶ丘)は、菊陽町を「希望の町」と話します。その理由を「都会的な部分もあれば緑のある風景もあり、利便性も良い。子育て支援も充実していて、今も将来も発展が期待できる町」と坂下さんは考えます。このような環境が、坂下さんを菊陽町に引

き寄せた「引力」であり、定住している「魅力」なのかもしれません。

菊陽村が誕生した昭和30年、この辺りは純農村地帯で人口も約1万2千人ほどでした。開発が進んだ昭和50年頃から、人口は大幅な増加を見せました。平成22年に行われた国勢調査では県下一の人口増加率で、全国でも4番目という高い値を示しました。十数年で

菊陽町には新しく転入する人を引き寄せる「引力」と訪れた人や昔から住んでいる人を定住させる「魅力」があります。急速な発展の一方で、新たな局面を迎えた菊陽のまちづくり。人々の心をつかむまちづくりには、菊陽町のさらなる発展の鍵が隠されています。

人口が急増し、急速な発展を遂げたのは、▼菊陽バイパス沿いや光の森の土地画整理事業▼下水道など生活基盤の整備▼世界的企業の立地▼大型ショッピングセンターの進出など、さまざま要因が組み合わさったからだと考えられます。

心をつかむまちづくり

大幅に人口が増加し、急速に発展した一方で、菊陽町では、この場所に昔から住んでいる人と新たに転入してくる人をつなぐ新たなまちづくりを進めることが求められています。ゴーヤカーテンの取り組みもその一つです。紫藤英二さん・和代さん(南方)が中心となって始まったゴーヤカーテンは、今や町のいたるところで見かけるようにな



北新山 岩崎 元視さん

昨年からはゴーヤカーテンに取り組んでいます。植え方のコツを教えたり、手作りの肥料を分けたり、実ったゴーヤを配ったりもして、おかげで近所とはとても仲良くしています。

した農産物を都市部で地産地消してもらうなど、お互いが必要とし合って交流を深めることが大事だと思います。そのための一つの手段として、ゴーヤカーテンは地域の核になり得ます。そこでできた小さな集まりがやがて町中に広がっていき、町が一つになってさらにより良い活気のある町になっていくと思えます」と力を込めます。

このように地域では住民同士が町の魅力を再発見し、町内へ広める活動を行っています。住民間でも、お互いの心をつかむまちづくりの輪は、ゴーヤカーテンの成長と共に確実に広がっています。ゴーヤカーテンのように、人がつながり、町が一つになる新たな取り組みが、菊陽町のさらなる発展を後押ししてくれるはずです。

ゴーヤカーテンをとおして 人とのつながりができました

遊び心から始めたゴーヤカーテンも、今では町のあちこちで見られるようになりました。ゴーヤカーテンに取り組んでいる一番に感じたことは、取り組んでいる家族の仲が良いということです。そこから隣近所の付き合いも生まれ、人のつながりもできました。

ゴーヤの緑には人を和ませ、人をつなげる力があると思います。人は機械ばかりに向き合っているはいけません。握手をして人の温もりを感じたり、緑を感じることも必要です。

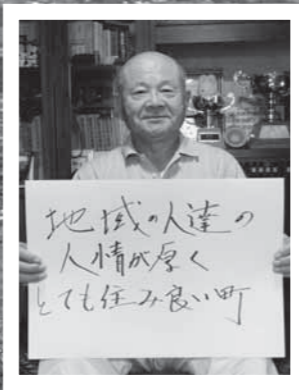
きっかけはゴーヤに限らずいろいろあると思います。住民同士がつながりあえば、菊陽町は人と緑にやさしいまちになっていくと思います。

INTERVIEW



グリーン(ゴーヤ)カーテン菊陽会長

英二さん(南方) 紫藤 和代さん



つむぐ



物語は伝説に

杉並木をきっかけに菊陽町にはいろんなものが生まれました。加藤清正の屋久杉伝説、杉並木の雄大で美しい景観、杉並木衰退後の補植活動、屋久島町との交流、そして姉妹都市盟約―。これらの物語があつてこそ、今の菊陽町が形づくられているのです。

100年後、杉並木や町の歴史はどのように語り継がれているのでしょうか。私たちが昔の物語をつむいで現在そして未来につなげていこうとしているように、100年後の未来もきっと、その先の未来に向かって伝えようとしている物語があるはず。いつでも未来は現在の延長線上にあります。今を大切に生き、伝えていく必要が私たちに

あるのです。物語をつむいでいけば、私たちが今語り継いでいるものは伝説といえるくらい、長く未来につないでいけるのかもしれない。

杉と菊陽町

町木に制定されている杉は、天に向かって真っ直ぐに伸びる町の将来像を表しています。

町内には、菊陽杉並木公園、すぎなみフェスタ、杉並木陸橋など、「杉」の名前が入ったイベントや施設がたくさんあります。杉は私たちに馴染みの

深いものであり、菊陽町と杉は切り離せないものです。杉があるから菊陽町なのか、菊陽町だから杉なのか、この関係はどちらにも当てはまり、相乗効果を生み出しています。

互いを必要とする町

杉によってつながりを持った菊陽町と屋久島町。町同士をつなげた杉は人と人をもつなげました。

菊陽町の中でもゴーヤカーテンによって住民同士のつながりの輪が広がっています。「まずは少人数の集まりでもいい。信頼し合えればおのずと人のつながりもできてきます」と話す紫藤さん夫妻。ゴーヤカーテンに限らず私たちがそのきっかけに気が付けば、屋久島町とのつながりのようなものをつかむことができるのです。

菊陽人の道しるべ

菊陽町と屋久島町、菊陽町の東と西、昔の伝説を実現した現在―。これらをつないだ杉は、人と人をつないでいます。杉並木は過去から現在、そして未来へと歩む菊陽人の道しるべです。菊陽に住み、菊陽で暮らし、菊陽と共に生きた人の数だけつむいだ物語がある―。インフラなどのハード面を整備した後は、私たちのハートをつなげていく必要があります。それが町を単なるベッドタウンではなく、人が暮らし、人生を根付かせるライフタウン(生活都市)へと高めます。

菊陽と杉がつくってきた物語はこれからも続きます。私たちはこの物語をつむぎ、未来に向かっていきましょう。

特集 杉と菊陽の物語(完)

参考文献

- 菊陽町史
- 400年を経た大津街道杉並木